



芥川龍之介著

侏儒の言葉

東京
文藝春秋社版

昭和二年十二月三日 印刷
昭和二年十二月六日 發行

發行所

東京市日本橋區
本小田原町二十三番地

文藝春秋社出版部

電話日本橋二八〇五番
振替東京七四三七八番

【侏儒の言葉】

(定價金二圓二十錢)

著者 芥川龍之介

東京市日本橋區本小田原町廿三番地
發行者 小峰八郎

東京市小石川區上富坂町三十番地
印刷者 新倉誠一

東京市小石川區上富坂町三十番地
印刷所 新倉東文堂

「侏儒の言葉」の序

「侏儒の言葉」は必しもわたしの思想を傳へるものではない。唯わたしの思想の變化を時々窺はせるのに過ぎぬものである。一本の草よりも一すぢの蔓草つるくさ——しかもその蔓草は幾すぢも蔓を伸ばしてゐるかも知れない。

芥川龍之介

侏儒の言葉目錄

侏儒の言葉

起一頁

澄江堂雜記

起一四九頁

病中雜記

起一五七頁

追憶

起一六五頁

文藝的な、餘りに文藝的な

起二〇七頁

侏儒の言葉

星

太陽の下に新しきことなしとは古人の道破した言葉である。しかし新しいことのないのは獨り太陽の下ばかりではない。

天文學者の説によれば、ヘラクレス星群を發した光は我々の地球へ達するのに三萬六千年を要するさうである。が、ヘラクレス星群と雖も、永久に輝いてゐることは出来ない。何時か一度は冷灰のやうに、美しい光を失つてしまふ。のみならず死は何處へ行つても常に生を孕んでゐる。光を失つたヘラクレス星群も無邊の天をさまよふ内に、都合の好い機會を得さへすれば、一團の星雲と變化するであらう。さうすれば又新しい星は續々と其處に生まれるのである。

宇宙の大に比べれば、太陽も一點の燐火に過ぎない。況や我我の地球をやである。しかし遠い宇宙の極、銀河のほとりに起つてゐることも、實はこの泥團の上に起つてゐることと變りはない。生死は運動の方則のもとに、絶えず循環してゐるのである。さう云ふことを考へると、天上に散在する無數の星にも多少の同情を禁じ得ない。いや、明滅する星の光は我我と同じ感情を表はしてゐるやうにも思はれるのである。この點でも詩人は何ものよりも先に高々と眞理をうたひ上げた。

眞砂なす數なき星のその中に吾に向ひて光る星あり

しかし星も我我のやうに流轉を閱すると云ふことは——兎に角退屈でないことはあるまい。

鼻

クレオパトラの鼻が曲つてゐたとすれば、世界の歴史はその爲に一變してゐたかも知れないとは名高いバスカルの警句である。しかし戀人と云ふものは滅多に實相を見るものではない。いや、我我の自己欺瞞は一たび戀愛に陥つたが最後、最も完全に行はれるのである。

アントニイもさう云ふ例に洩れず、クレオパトラの鼻が曲つてゐたとすれば、努めてそれを見まいとしたであらう。又見ずにはゐられない場合もその短所を補ふべき何か他の長所を探したであらう。何か他の長所と云へば、天下に我我の戀人位、無數の長所を具へた女性は一人もゐないのに相違ない。アントニイもきつと我我同様、クレオパトラの眼とか唇とかに、あり餘る償

ひを見出したであらう。その上又例の「彼女の心」！ 實際我我の愛する女性
は古往今來飽き飽きする程、素ばらしい心の持ち主である。のみならず彼女
の服裝とか、或は彼女の財産とか、或は又彼女の社會的地位とか、——それ
らも長所にならないことはない。更に甚しい場合を挙げれば、以前或名士に
愛されたと云ふ事實乃至風評さへ、長所の一つに數へられるのである。しか
もあのクレオパトラは豪奢と神祕とに充ち満ちたエヂプトの最後の女王では
ないか？ 香の煙の立ち昇る中に、冠の珠玉でも光らせながら、蓮の花か何
か弄んであれば、多少の鼻の曲りなどは何人の眼にも觸れなかつたであらう。
況やアントニイの眼をやである。

かう云ふ我我の自己欺瞞はひとり戀愛に限つたことではない。我我は多少
の相違さへ除けば、大抵我我の欲するままに、いろいろ實相を塗り變へてゐ

る。たとへば齒科醫の看板にしても、それが我我の眼にはひるのは看板の存在そのものよりも、看板のあることを欲する心、——牽いては我我の齒痛ではないか？ 勿論我我の齒痛などは世界の歴史には没交渉であらう。しかしかう云ふ自己欺瞞は民心を知りたがる政治家にも、敵狀を知りたがる軍人にも、或は又財況を知りたがる實業家にも同じやうにきつと起るのである。わたしはこれを修正すべき理智の存在を否みはしない。同時に又百般の人事を統べる「偶然」の存在も認めるものである。が、あらゆる熱情は理性の存在を忘れ易い。「偶然」は云はば神意である。すると我我の自己欺瞞は世界の歴史を左右すべき、最も永久な力かも知れない。

つまり二千餘年の歴史は眇たる一クレオパトラの鼻の如何に依つたのではない。寧ろ地上に遍滿した我我の愚昧に依つたのである。晒ふべき、——し

かし壯嚴な我我の愚昧に依つたのである。

修身

道德は便宜の異名である。「左側通行」と似たものである。

×

道德の與へたる恩恵は時間と勞力との節約である。道德の與へる損害は完全なる良心の麻痺である。

×

妄に道德に反するものは經濟の念に乏しいものである。妄に道德に屈するものは臆病ものか怠けものである。

×

我我を支配する道德は資本主義に毒された封建時代の道德である。我我は殆ど損害の外に、何の恩恵にも浴してゐない。

×

强者は道德を蹂躪するであらう。弱者は又道德に愛撫されるであらう。道德の迫害を受けるものは常に強弱の中間者である。

×

道德は常に古着である。

×

良心は我我の口髭のやうに年齢と共に生ずるものではない。我我は良心を得る爲にも若干の訓練を要するのである。

×
一國民の九割強は一生良心を持たぬものである。

×
我の悲劇は年少の爲、或は訓練の足りない爲、まだ良心を捉へ得ぬ前に、破廉恥漢の非難を受けることである。

×
我の喜劇は年少の爲、或は訓練の足りない爲、破廉恥漢の非難を受けた後に、やつと良心を捉へることである。

×
良心とは嚴肅なる趣味である。

×
良心は道德を造るかも知れぬ。しかし道德は未だ嘗て、良心の良の字も造

つたことはない。

x

良心もあらゆる趣味のやうに、病的なる愛好者を持つてゐる。さう云ふ愛好者は十中八九、聰明なる貴族か富豪かである。

好 惡

わたしは古い酒を愛するやうに、古い快樂説を愛するものである。我我の行爲を決するものは善でもなければ惡でもない。唯我我の好惡である。或は我我の快不快である。さうとしかわたしには考へられない。

ではなぜ我我は極寒の天にも、將に溺れんとする幼兒を見る時、進んで水に入るのであるか？ 救ふことを快とするからである。では水に入る不快を

避け、幼兒を救ふ快を取るのは何の尺度に依つたのであらう？ より大きい快を選んだのである。しかし肉體的快不快と精神的快不快とは同一の尺度に依らぬ筈である。いや、この二つの快不快は全然相容れぬものではない。寧ろ鹹水と淡水とのやうに、一つに融け合つてゐるものである。現に精神的教養を受けない京阪邊の紳士諸君はすつぽんの汁を啜つた後、鰻を菜に飯を食ふさへ、無上の快に數へてゐるではないか？ 且又水や寒氣などにも肉體的享樂の存することは寒中水泳の示すところである。なほこの間の消息を疑ふものはマソヒズムの場合を考へるが好い。あの呪ふべきマソヒズムはかう云ふ肉體的快不快の外見上の倒錯に常習的傾向の加はつたものである。わたしの信するところによれば、或は柱頭の苦行を喜び、或は火裏の殉教を愛した基督教の聖人たちは大抵マソヒズムに罹つてゐたらしい。